
お人好しの牛乳

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お人好しの牛乳

【Nコード】

N3701E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

深夜2時、毎日のように牛乳を買いにくる女。彼女の魂胆は……

コンビニに牛乳を買いにくる客は意外と多い。

もちろん若い子はあまりいない。

対象はお年よりや奥様方だ。

健康のために飲んでいるのか、最近ではOL風の客も多く購入してくるようになった。

お陰様で牛乳は超ヒット商品ではないが、息の長いロングセラーとなっている。

だから、深夜にもかかわらず二十代くらいの若い女性が、1リットル入りの牛乳パックを2本買おうが気にはならない。

しかし、それが一ヶ月も続くとなると……

「また来てますよ、店長」

そう囁いたのは最近雇ったアルバイトの学生。

今年厄年になる妻から、「深夜のコンビニは強盗に狙われやすいから心配だわ。それにあなたはお人好しだし」と言われ、屈強な体育会系のバイトを新しく雇ったのだ。

なかなか真面目に働いてくれているので、40を過ぎてめっきり体力の落ちた店長の私には有り難い存在となっている。

「やっぱり牛乳買っくんすかね？」

日焼けした顔に笑みを浮かべてバイト君が囁く。

店内には我々の他には誰もいない。

カウンターに並ぶ私と彼、そして客の彼女の三人きり。

この一ヶ月、きっかり深夜2時に牛乳を買いにくる女客である。

何故だか少し気味が悪い。

「……たぶんな」

私は彼女から視線を離さずバイト君に答えた。

女は、特徴のない顔立ち……というか化粧つけのまるで無い、どこか陰のある顔。

そして、どこにでもありそうなＴシャツにＧパンという質素な服そうだった。

痩せた腕に抱えるものは、いつもの牛乳が２パック。

そう、いつも通り。

妙にいわくありげなその客に、不気味ながらも好奇心はかきたてられる。

一体どんな人物なのか……

「本当に店長が言ってたみたいに、幽霊だったりして」

ニヤニヤしながら言うバイト君。

私は沈黙することで返答する。

もちろん、少し黙ってるという意味。

彼の言った幽霊というのは、私が以前話してやった地元の怪談話のこと。

簡単に言えばこんな内容である。

まだ、戦後を色濃く残した昭和の時代。

高知県のある小学校で毎日牛乳パック（昔懐かしの三角形のものだ）が一つ足りなくなる事件が起こった。

給食のおばさん達が犯人を突き止めるべく、ある日の朝、牛乳が

配達される前に学校に陣取って見張っていた。

はじめは浮浪者の仕業かと思われたが、ふたを開けてみればなんと二十五、六の女性が犯人だった。

おばさん達は女に、「そんなことしたら駄目ですよ」と声をかけた。

すると、彼女は牛乳パックを抱えたままスタスタその場を離れたのだ。

後を追うおばさん達。

牛乳パックを抱えた彼女は、学校近くの森へスウッと消えていった。

慌てて付近を懸命に探す。

そこで彼女達が見つけたものとは……

白骨化した女性の死体と、生後2ヶ月くらいの赤ちゃん（かろうじて息のある）だった。

後に警察の調べで分かった事であるが、女性は病気を苦にしての自殺だったらしい。

恐らく、赤子と無理心中を図ろうとしたのであろう。

だが、いざとなると我が子を道連れにはできなかった。

つまり学校給食から毎日一つ失われていた牛乳は、生き残ってしまった赤ちゃんに飲ませるため、死んだ母が幽霊になってまでも盗んでいたのだというお話。

失礼な事だが私には、この女幽霊と例の陰気な女性客がダブって見えていた。

若い女性がこの一ヶ月間、毎日1リットル入り牛乳パックを2本も購入するなんて信じられない。

それも深夜2時。

何か訳がある。

私は、そう睨んでいた。

まあ、彼女が幽霊とは思わないが……何か裏がありそうだと私の第六感が教えてくれるのだ。

そして、今日もまた……

女は牛乳を2本小脇に抱えている。

そう、同じ事の繰り返し。いつもと同じだと思っていた。

だが、その時。

「あつ、お客さん。お金……」

突然だった。

あの女性客が牛乳を抱えたまま、脱兎の如く駆け出したのだ。

自動ドアをすり抜け走り出した女。

あつという間に見えなくなった。

暫く呆然としていた私だったが、すぐに我にかえる。

「ま、万引きか？」

信じられなかった。

だがそんな私の声にバイト君が素早く反応する。

「お、追い掛けてください店長。ここは僕に任せて！」

「お、おう」

私は促されるまま彼女を追った。

女はかなりのスピードで走っていたが、何とか見失う事なくついていく。

どれくらい走っただろう？

国道をひた走り、とうとう町外れにまで来てしまった。
そして、ここあたりで私の体力は限界がきた。
息が切れてもう走れない。

よく考えたら私じゃなくてバイト君に追わせれば良かったのだ。
こんな時のための体育会系だろ！

だが、時すでに遅いだ。

ついに力尽きた私は悔しまぎれにこう叫ぶ。

「ま、待て、逃げられるもんじゃないぞ！ お前の顔は防犯カメラにだって写っているんだからな」

すると、それまで快調に走っていた女がピタリと止まった。

（えっ、どうして？）

どうみても私より体力は残っているように見える女。

一体、何故だ？

すると女は、ゆっくり振り向き不敵な笑みを私に向ける。
いったい何がおかしいのか？

大胆不敵なその態度に何だがとつても腹がたつ。

すると、ぜえぜえ荒い息を吐いている私に、彼女が近づきながら
こう言った。

「ご苦労様、店長さん。もう鬼ごっこはおしまいにするわ。はい、
これお返ししますね」

なんと彼女はうずくまる私の足元に2本の牛乳を置いた。
あまりのあっけなさにキョトンとしてしまう私。

「ごめんなさいね、私むかし陸上部だったから足は速いの」

なるほど、彼女は息一つ乱れていない。
だが、だったら何故そのまま逃げない？

「それじゃあ」

彼女は爽やかに笑うと、また軽快な走りで私の元から去っていった。

ますます訳が分からない。

だが、混乱はするが盗まれた牛乳は取り戻した。

商品を手元に引き寄せてから、ようやく立ち上がる。

私は、何とかコンビニへと戻っていった。

道すがら、（何故彼女はあることをしたのだろうか？）と考えながら歩いた。

帰りの道中にはまったく分からないままであったが、コンビニに帰った時その謎は全て解けた。

どうしてかって？

それは、店の商品という商品が全て盗まれていたからだ。
ついでに、体育会系のあのバイト君も消えていた。

「や、やられたなあ」

もうすぐ夜明けだというのに、コンビニには何も残されていない

のだ。

朝食を買いにくるサラリーマンやOL、さらには学生さん達に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

それにしても近頃の学生は……頭も良いし度胸があるよとつくづく思う。

バイト君と牛乳を買いに来ていた彼女はグルだったのだ。

私に彼女の後を追わせそのスキに店の商品をいただくという作戦。幽霊云々は私に付き合った芝居なのだろう。

はなから商品目当てでバイトに来ていたと思われる。

防犯カメラのスイッチはバイト君に切られていて何も写っていない。

恐らく他にも共犯がいたのかもしれない。

何もかも……乾電池すら残さずに持って行かれた。彼一人にしては手際が良すぎる。

当然というべきかバイト君の名前も住所も偽であろう。

それにしても、まんまと騙された私もふがない。

すぐに警察に電話して、お巡りさんに来てもらい、全てを話した。処理が終るとほっとしたせい……私は、自分の喉がカラカラなのに気がついた。

手元には女から取り返した牛乳パックが2本ある。

だが、今は何だかビールが無性に飲みたかった。

私は牛乳パックを空になったコンビニの片隅にそっと置き、久しぶりに長期休暇になりそうな職場を後にした。

家に帰ろう。

すでに日は昇り、朝日がまぶしいくらいに私を照らす。

もうすぐ夏だ。

照りつける初夏の陽射しに、私は一つの決意を固めていた。

それは……帰ってすぐにビールを飲もうという決意。
今日くらいは、朝から酒を飲んでもバチはあたるまい。

だが、家に帰って私は驚いた。

冷蔵庫を開けてみたらビールどころか牛乳すら置いてなかったのだ。

この時になって、ようやく私の心にムラムラと怒りの炎が湧いてくる。

「くそっ、あの女め！　せめて冷えた缶ビールを盗んでくれれば良かったのに」

その後、事情を全て話した妻に呆れた顔でこう言われた。

「やっぱりあなたはお人好しね」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3701e/>

お人好しの牛乳

2010年12月18日14時22分発行